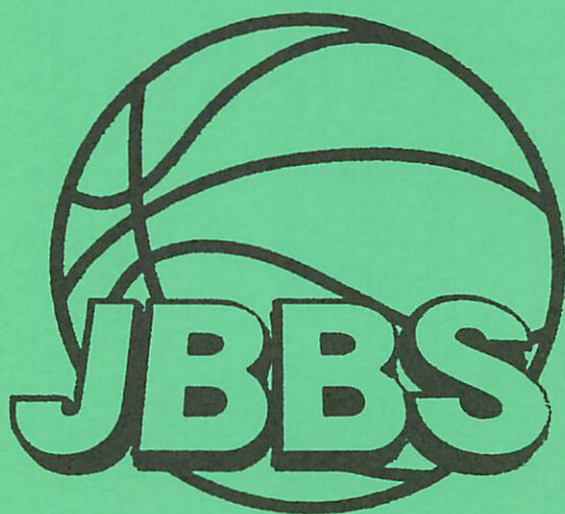


バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:50



2011年5月

NPO法人 日本バスケットボール振興会



手にとった瞬間、キミは驚くはず。
その翼のような軽さとしなやかさに。
1gでも軽くするために、あらゆる素材を
厳選し構造を何度も検証し
そして遂に、軽量でありながら
優れたクッション性と包み込む
ようなフィット感を実現させた。

夢は必ず叶うと信じるための1足。

ウエーブホープネオ

希望という名の翼、新登場。

WAVE HOPE NEO



キミに翼を。

目 次

- 理事会と定期総会を開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 世田谷区中学生クリニック開催に協力・・・・・・・・・・普及部・・・・ 15
- bjリーグ閉幕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・編集部・・・・ 19
ファイナル4 浜松・東三河フェニックスの二連覇
- JAL RABBITS 30年間の歩み・・・・・・・・・・・・・・・・中瀬達雄・・・・ 21
同好会時代から大逆転の1部昇格へ
- 「バスケット村」 能登半島・・・・・・・・・・・・・・・・歴史部・・・・ 25
羽咋町栗ノ保村 昭和初期のバスケット
- スペシャルオリンピックスを支援・・・・・・・・・・・・編集部・・・・ 28
- 事務局だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

世田谷区中学生クリニック開催に協力

[普及部]

連休最終日の5月8日（日）、東京世田谷区芦花中学校体育館で世田谷区中体連バスケットボール部が主催し、振興会が協力して中学生初心者向けクリニックが開催された。

このクリニックは昨年世田谷区中体連有志の先生方と振興会が懇談会をもち、中学生の技術向上のためにお互いに協力し合ってクリニックを開催することを確認した結果実現したものである。

当日は、世田谷区内7中学から男女合わせて78名の中学生（殆どは今年入学したバスケットボール未経験の部員）が参加し、引率した7名の先生方と父兄も一緒に加わった。

振興会からは、従野理事（元女子全日本代表監督・元学習院中・高校校長）、結城理事（元男子全日本代表選手・モントリオールオリンピック日本代表選手）が講師として協力、蒲田副理事長、渡辺副理事長、JBL2・WIリーグの「ビッグブルー東京」の選手も協力参加した。

午前中は女子、午後は男子を対象にそれぞれ同じ内容のクリニックを3時間にわたって実施したが、理論から実践に至るまで熱のこもったクリニックとなった。

クリニックは従野講師による理論編、実技編、チームディフェンス編、結城講師による技術論の講義があり、実技ではオンザコートでの指導もなされた。

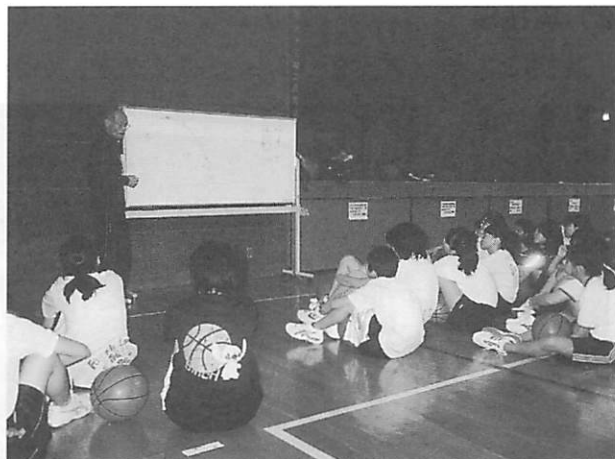
最初に従野講師から次のような内容の指導があった

1) 理論編

冒頭、従野講師から白板を使った講話が始まる。「上手になろう、やって出来ないことはない」という気持ちが大切。継続は力なり、練習はうそをつかないし不可能を可能にする」といった精神論から「目標達成に富士山頂に登るルートが複数あるように、バスケの練習方法にもいろいろな方法がある。指導してくれるコーチの云う通りに取り組むことが一番大切、いろいろな人からアドバイスされ、迷った時は顧問の先生の云われることを聞くこと。自分が信じたことしか力にならないので」といったことが中心に話された。

いまどきの中学生にこの種の話がはたして通用するのかとやや心配されたが、予想に反して例外なく熱心に講話に聞き入る態度はまさに印象的であった。講師の従野理事は、元学習院中・高校の校長先生を務められただけあって、子供の琴線に触れるようなお話はさすがであった。

講話の次なる話題は計数的な技術論へ進んでいく。「バスケットボールの試合ではボールを保持するチャンスが両チームに同じ回数だけ与えられている。では何をすれば試合に勝てるの



か？ A、B両チームがコート上にいる試合中、各々80回ボールを保持する機会があるとしよう。Aチームは80回シュートにつなげているが、Bチームは60回しかシュート出来ないとすると、このシュートに結びつけられない差は、ボールキープ力の不足やミスプレーなどとなる。したがって相手にミスさせるディフェンス力を強化し、オフェンスリバウンドを取ればその分シュートチャンスは増えてくることになる。平素の練習はこの60回を80回に引き上げるためと云ってもよい。」

「次にシュートに結び付けても、得点しないと良い攻撃とは云えない。そのためにはシュートの確率を上げる必要がある。ここでチームのシュート確率について数字的にみてみよう。チームのシュート確率がミドルシュートで0/5、ドリブルによるドライブインでは5/5、ジャンプシュートでは1/5、ポストプレーで4/5、合わせて10/20としよう。

確率を引き上げるにはどうすればよいか。確率の高いシュートを多くし、入らないシュートを減らす。ミドルシュートとジャンプシュートをそれぞれドライブインとポストプレーに切り替える。するとドライブインで10/10、ポストプレーで8/10、合わせて18/20になる。しかしながらミドルシュートとドライブインシュートは表と裏の関係にあり、ミドルがうまくならないとドライブインもうまくいかない。」

こうした計数的な講話に対して、参加した子供たちはなるほどといった納得の表情であった。講話の最後には「このドリルがなぜ必要なのか、どうすればうまくやれるのか」を常に考えながら練習することが大切と強調、従野理事の恩師でもある故吉井四郎コーチの理論も引き合いに出して「理論を教えるコーチは有り難いもの、理論が理解できれば一生懸命努力せざるを得なくなる。皆さんも先生から良いことを教わって欲しい。身体の使いすぎは怪我に繋がるが使わないと退化し、うまく使うと強くなる。体力的には一生懸命目いっぱい頑張るが、常に気持の上で余裕を持つことと、楽しみながらやることが大切であり、練習における失敗は決して恥ではない」と締めくくった。

2) 実技編

最初にスキップ、ダッシュ、バック走、かかとだけのダッシュ、腿上ランニング等の個人ドリルが行われ、次に二人1組になってボールハンドリング強化のドリブル、ボール2



個を使つてのパス練習が行われた。

特にパスミスを防ぐためのディフェンスの防御可能範囲の確認や、ボールの発点をどこにするかの意識とノーモーションでのパスの大切さなどがアドバイスされた。

次にはドリブルシュートとシュートのドリルが行われた。ドリブルシュートで足を合わせるには、右手左手ともにドリブルを受け

るときにボールを掬い上げるようにすると、そのときの受け足は右手の場合は右足、左手の場合は左足となってシュートタイミングとしても良くなること。

シュートでは両手シュートだとゴールに正対しないとシュートできないが、片手シュートでは必ずしも正対しなくてもシュート可能で、シュート範囲が広がって有利であること。手首の力を抜いて肘を伸ばし、重心が飛んでいく方向にボールを投げる意識が大切であることが指導された。韓国の伝説的名シューターでもあったシン・ドンパ氏が「シュートはボールの回転が全て」と言っているが、肘を伸ばし最後に人差し指と中指で押し出すような感じでシュートすれば自然とボールの回転は良くなることが強調された。

3) チームディフェンス

1対1のディフェンスの場合抜かれることは仕方がなく、他の選手が如何にカバーするかが大切であることと、チームディフェンスとしてお互いに協力し合うことが話された。またディフェンスを強くするには自分を危険な状態において、抜かれないように練習することや、抜かれた場合でも抜かれ方があることなどが教えられ、チーム全体として「ディフェンスの協力は強力なり」と説明があった。

次にかつて日本の名シューターでもあった結城講師から次のような技術論が披露された

バスケットボールというスポーツは狭いコート上でディフェンス、オフェンスが互いに相対して得点を競い合うスポーツである。したがってコート上におかれている状況で自分は何をすべきかを判断し、瞬時に行動に移すことが成功につながる重要なポイントとなり、1秒単位でめまぐるしく状況が変わることもある。

そのとき状況判断が正しかったとしても、前述のようにたった1秒でも行動が遅れれば正しかった判断がそうではなくなり、結果的にミスプレーとなってしまふ。

“目で見て”、“今何をすべきかを判断して”、“瞬時に行動に移す”と云った一連の動作を瞬時に行うことが成功につながり、優れたプレーヤーとなっていく。

そのためには、プレー全体を見て状況を常に把握することが重要であり、目線とはいつもリングの高さをキープし特別な時以外は下を向かないこと。目線がリングの高さをキープすることによって敵、味方全体の状況が把握でき、自分が何をすべきかを正しい判断ができるようになる。

瞬時に行動するためには身体の方角性が求められる。バスケットボールというスポーツは大きく分けて8方向（前後、左右、上下、左右回転）へ瞬時に対応（反応）しなくてはならない。つまり相手あるいは味方の動きや状況に対して、何時どんな状態でも瞬時に8方向への動きが求められており、その要求に対応するために常にその準備をしていなくてはならない。

私はその準備体制を「バスケットボールスタンス」と名付けている。「バスケットボールスタンス」とは、①目線はリングの高さに、②足のスタンスは肩幅よりひとつほど外へ広く、③つま先と膝は進行方向、肩のラインと同方向をキープ、④膝を曲げかかどが浮き、親指の付



け根（母子きゅう）に重心を載せることである。

これら①から④の姿勢を「バスケットボールスタンス」といい、コート上では決してかかとをつけないような姿勢を保ち習慣化すれば、瞬時に8方向へ対応することができ、この姿勢を習得することがスーパースターへの条件となる。

シュート、パス、ドリブル、ディフェンスなど全てのプレーは必ずこの「バスケットボールスタンス」の姿勢で行うよう努力することが大切。

次に重要なプレーのひとつでもあるシュートについて、基本的には数多く出版されている技術本の通りだが、ご参考までに私の考え方を申し上げたい。

現役時代に外角から毎日1,000本のシュート練習を行い、970本位成功するレベルであったが、それでも試合になると確率が50%位に落ちた。正しいフォームで数多く継続して練習することが名シューターへの道であると思う。

ドリブル、パスなどのボールコントロールは指先で行うのが常識だが、指先の強弱や方向性なども必要であり、特にシュートにおいてはそれらが求められ、ドリブルが床にボールをコントロールするのに対して、シュートはリングに向かってドリブルをする感覚にすると良い。

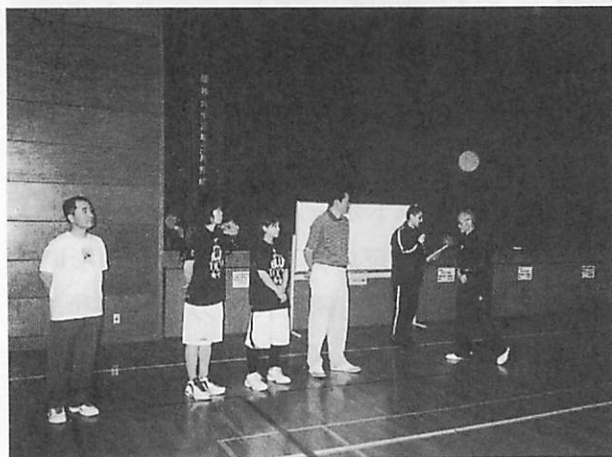
少し難しいかもしれないがイメージトレーニングすると共に、正しいフォームで数多く練習して自分のシュートフォームを確立することがシュート確率を上げる重要なポイントとなる。

3ポイントなど、決して無理な遠投はしないことも自分のフォームを崩さない大事なことである。

結びに

参加者の殆どが初心者であったことから、実技においてはややぎこちなさも見られたが、中学生たちが講師の話に耳を傾け、実技で実践しようと努力する姿には好感が持てた。今後もこのような講習会に対して振興会として協力していくことが、将来の日本バスケットの技術向上に好影響を与えるものと確信することができた。

お忙しい中ご協力いただいた先生方に感謝申し上げますと共に、今後も継続してこのようなクリニックが開催できるよう希望いたします。



さらに今後、他の地域でも同様のクリニックが開催されるのであれば、振興会の人材を活かして協力していくことを申し上げます。

〔副理事長 蒲田尚史〕

b j リーグ閉幕

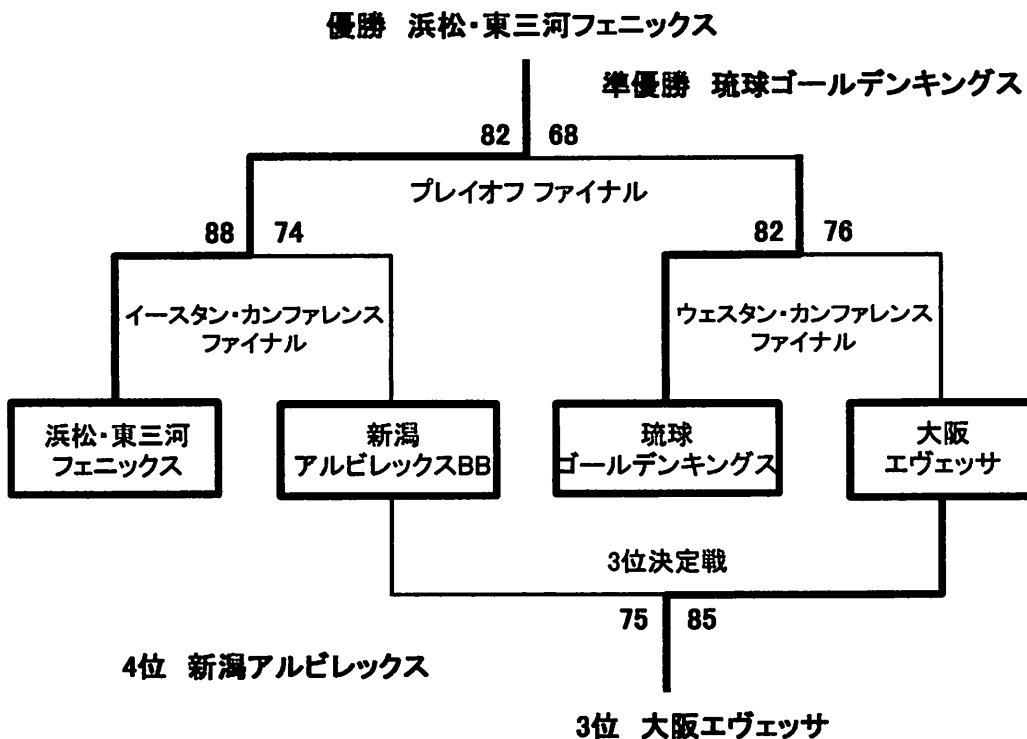
ファイナル4 優勝は浜松・東三河フェニックスの二連覇

[編集部]

東日本大震災の影響で3チームが活動を停止したb j リーグは、その後も残ったチームで「共に乗り越えよう」とのスローガンを掲げてシーズンを続けた。リーグ戦の結果、東西両カンファレンスの上位4チーム合計8チームによるプレイオフが行われ、更に5月21・22日、有明コロシアムにおいてプレイオフ上位4チームによる復興支援ファイナル4を開催して閉幕した。

b j リーグでは東日本大震災で活動を停止した、仙台、埼玉、東京のチームに所属する選手を、希望があれば他の球団で雇用しプレーを続けることを容認。何人かの日本人選手がシーズン途中から他の球団へ一時的に移ってプレーを続けたが、選手にとってシーズン半ばで挫折するよりはいい結果につながったようだ。

プレイオフの結果



プレイオフ決勝戦

プレイオフ決勝戦は、昨シーズンの覇者浜松・東三河フェニックスと沖縄の琉球ゴールデンキングスとの対戦となり、浜松・東三河が琉球を制して2シーズン連続優勝を飾った。

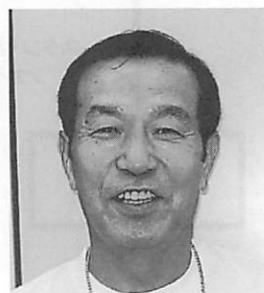
チーム \ P	1	2	3	4	計
浜松・東三河フェニックス	13	18	21	30	82
琉球ゴールデンキングス	17	6	21	24	68

浜松・東三河は立ち上がり固さが出て思うように相手のゴール近くに切り込めず、琉球に先行を許した。ところが第2ピリオドに入ると浜松・東三河の岡田が奮起して流れを変えた。得意のミドルシュートに加えてゴール下へ切り込んで得点を重ねる。琉球も何とか岡田を止めようとディフェンスを頑張るがミドルシュートを止めようとするとドライブされたりしてうまくいかず接戦となる。これに刺激されたかパーマーやアーノルドなど外国人選手も奮起して、逆転に成功し前半を終わって浜松・東三河が8点をリードする。

後半に入っても両者の競り合いが続いたが、昨シーズン優勝している浜松・東三河はその経験を生かして相手に主導権を与えず、第4ピリオドにダメ押しのリードを奪いそのまま危なげなく逃げ切った。

昨シーズンの優勝後、チーム中心選手だったホワイトを放出した浜松・東三河だったが「絶えず全員で全力プレーをすること」を強調してきた中村ヘッドコーチの手腕どおりの結果となった。東日本大震災の後の原発問題に絡んで司令塔だったディクソンが帰国し、ポイントガードに苦しんだが代わる他の選手が奮起し、全員バスケットでの二連覇となった。

昨シーズン優勝した後、本誌インタビューに快く答えてくれた70歳の中村ヘッドコーチは試合後に「厳しい練習に耐え抜く日本人選手のひたむきな姿勢に外国人選手も奮起し、一丸となって優勝を勝ち取ることができた。チーム作りにおいて重要視するポイントガードの選手が震災の影響でいなくなり、一時はどうなる事かと思ったが代役の選手が精一杯責任を果たしてくれた」と語っているが、外国人選手をも含めた厳しい指導方針が今期も実った結果となった。



なお、3位決定戦では大阪エベッサが新潟アルビレックスを85対75で下している。



JAL RABBITS 30年間の歩み（その1）

◇同好会時代から大逆転の1部昇格へ◇

中瀬 達雄

★まえがき★

Wリーグ所属の日本航空 JAL RABBITS が、先のシーズン終了をもってチーム活動の幕を閉じた。小生は、強化チームの土台となった同好会時代の立ち上げから、強化チームへの切り替え、その後の日本リーグチームとしての活動に携わってきた。会社定年後は、外部支援者として試合応援にかけつけ、ラスト数年は殆どのゲームで観覧席にいた。

このような立場にはあったが、本稿は全くの個人的な思いからの執筆である。ただ、大部分の休廃部チームが尻切れトンボで消えていった状況を、実業団連盟役員として横目で眺めていたので、JALだけはケジメをつけたいものと考え、この場を利用させていただいた。

★土台を作った「純アマ日本一」の同好会時代★

今年のシーズンを終える頃のマスコミは、JAL RABBITS に対して「創部以来42年」との言い方が多くなっていた。

日本航空で、1967年3月に高校女子コーチを辞めた小生に、まわりから「バスケットをやりたい女子が数人いるからコーチを」の声が掛ったのが翌月だった。「純真な高校生に比べ、遊び好きな(?)OLはどうも」と気は乗らなかったが、いつの間にか週1回程度、蒲田女子高の暗い体育館で練習をやっていた。

練習をして5人揃えばゲームがやりたくなり、まずは、東京都内で地元の大田区大会に出てみると、上位は無理だが勝てるチームもあった。となると、実業団連盟役員の関根正司さんもいたからか、次は関東実業団かとなり2年後にはリーグ戦に参加していた。関東実業団では4部2位から始まって、11年後の80年には2部3位に到達していたが、この間に人数が足らず試合を棄権した記憶はない。

スタート直後に社内に体育館ができたことも活動の推進力になっていたと思う。更なる活動推進力が72年開始の「エアライン・トーナメント」である。アジア・オセアニアの航空会社が持ち回りで毎年開く大会、これに参加することが、いつの間にかメンバーの大きな目標になっていた。初めは戦力不安で恐る恐る参加した女子だが、相手は更に弱く初回72年シドニー大会から77年クライストチャーチ大会まで6回連続優勝という結果が、広い意味でのチーム力を強くし、維持していった。

強化チームを経験してから考えて見ると、純粹ボランティアだった同好会チームのほうが、チームを維持すること自体が本当に難しかった。そのために、少人数での効果的な練習、チームワークのための夜の集まり、三角・四角の電話網など創意工夫が必要な毎日だった。

その結果の合言葉が、「選手を採用しない、日本一の純アマチーム」であった。

★会社30周年でスポーツ強化チームを★

1980年が会社創業30周年にあたり、いくつかのイベントの中に「強化スポーツチーム」とのアイテムが取り上げられていた。

さて、どんなスポーツを強化するかの段になって、まずは、個人スポーツより団体スポーツのほうが、社内・社外向けに効果的ではなかろうか。次に、男か女かになると、業績に関

らず採用が安定している客室乗務員がいる女性が良いのではないかと。

更に、具体的なスポーツとなると、次のような理由でバスケットになったと聞いていた。

- ① 練習場である体育館が、勤務地である羽田にある
- ② 現に同好会チームが、関東実業団 2 部のポジションを得ている
- ③ バスケット界に精通し、顔がある中瀬、関根のスタッフがいる

建前はこのような話になるが、実のところは、後に会社社長、日本協会会長になった当時の労務部兼子勲氏の尽力によるところとの見方が、社内では常識的であった。

★内部体制の整備と選手のスカウトへ★

1980 年 7 月に社内決裁が済み、チーム体制の整備に取り掛かったが、小生は情報システム部門教育グループに所属し、片手間での準備作業だった。当時、日本協会会長・当社取締役だった菊池稔東京海上会長から、決済役員会の前、山地社長にゴルフ場で「バスケット部はどうなんでしょうね？」と尋ねられ「良いですよ。大いにやってください」と言っておいたとの話もお聞きした。

まずは選手をと、ネクタイ姿の自分に違和感を覚えながら日体大（日本体育大）体育館の前に立ち、石川教授を訪問したのが 80 年 9 月 30 日の午後であった。「うちの選手は、週 4 回なら 4 回なりの練習で力を発揮できます。」との言葉が耳に残っている。教員試験の結果を待つ、いわゆる滑り止めにスチュワーズ内定を出す格好であった。成城大の両角先生、日女体大（日本女子体育大）の大門先生、東女体大（東京女子体育大）の鯛谷先生、市邨学園の新井先生、いずれもこのときお世話になった方々である。もちろん筑波大にも声をかけたが「じゃあマネジャーでも・・・」との返答だったので諦めてしまった。

★話題チームも、航空機事故・出場辞退で終わる =1981 年度=★

伊藤(日体大)はじめ 9 人の新人を迎え(入社健診の都合で 1 人追加)、4 月からいよいよ活動を開始した。3 ヶ月の地上職場研修を経て数カ月間の客室訓練中は日勤だったので、土曜日を含めて週 4 回の練習を組んだ。小生自身が指導を担当し、土曜午後は救難訓練の勉強も手伝った。地上訓練を終えて客室乗務になると業務と両立させる練習スケジュールの作成は困難を極めた。9 日サイクルの勤務に対応すべく休日が重なるよう 2 グループに配置し、休日 2 日と夕刻帰着の勤務を割り当てて帰着後に練習時間を設定した。9 日サイクルのため曜日とは関係なくなり、体育館の確保には他運動部の方に大きな迷惑をかけることになった。

さて、バスケットの方は、4 月 14 日の初ゲームで堺社長率いる「堺」チームを 86 対 22 で破り、続く大田区大会で優勝し、関東実業団リーグ(2 部)を迎えた。優勝して 1 部昇格とのもくろみは、最終・朝日生命戦で見事に外れ、前半の 10 点差を盛り返せず 1 ゴール差の敗戦となり、準備していた祝勝会は残念会へ看板替えとなってしまった。

秋の選手権で勝てば全国への道はあるとの目標で、1 部チームの丸紅、東銀（東京銀行）を連破した。興銀（日本興業銀行）に準決勝で敗れたが、関東第 3 位のランクで日本リーグに繋がる全国大会の切符を手にした。

2 月、広島での全国大会へ出場するため、大会前練習中の 9 日早朝に羽田沖事故のニュースが飛び込み、本社とのやり取りの末、大会の出場を辞退して帰京することとなった。

★2 部でも日本リーグへの壁は、なお高し =1982 年度=★

内本(武庫川大)など新メンバー 7 人が加わり強化選手だけの 17 人体制となり、コーチは昨秋から俊野良治(運送部)が担当していた。

春の関東リーグ(2部)は全勝優勝し、文句なしの1部昇格となった。秋の関東実業団は準決勝で鷺宮(鷺宮製作所)に敗れたが、前年同様の関東3位で京都での全国大会へ駒を進めた。

予選リーグでは関東で敗れた鷺宮を含め3戦楽勝し、日本リーグ挑戦に繋がる準決勝で三菱重工長崎と対戦した。ところが前半センターの4ファウルもあり40対20で終え、後半の追い込みも及ばず5点差で涙を飲み、日本リーグ(2部)への道は来年へ持ち越された。

この年には社内ファンクラブが設立され、テレビや雑誌などのマスコミ取材も多くなってきた。

★石の上にも3年、ようやく日本リーグ2部へ =1983年度=★

強化1期生のうち7人が2年間で引退し、木塚(日体大)ら6人の新人が補強され、シーズン途中に社外から佐治恒孝コーチが就任した。

春の関東リーグ戦は全勝優勝、名古屋での実業団地域選抜リーグも優勝したが、秋の関東選手権は決勝で興銀に敗れて第2位での全国実業団大会への出場となった。6月には、路線開設10周年記念の会社行事としてハバロフスクへ遠征し、親善試合2ゲームを行った。

2月、鳥羽・伊勢での昇格をかけた大会では、予選リーグを全勝で通過し、勝てば即昇格の大会準決勝で日本電装と対戦した。試合は前半で28対10と大量リードし、ハーフタイムに部長・監督が横腹をつつき合う余裕もあって、念願の切符を手にすることができた。

★日本リーグ2部初年度で、8勝6敗第4位に =1984年度=★

いよいよ日本リーグ(2部)への登場である。8チームでの春・冬の2期制で14ゲームを戦うリーグ戦、結果的には8勝6敗、日電(日本電気)、三菱電機名古屋、興銀に続く第4位であった。昇格直後としては、まずまずの戦績で、ベスト5に2年目の田上(樟蔭東短大)が選ばれた。

前年のハバロフスクに続き、中国線開設10周年記念として11月に遠征し、北京、上海で2ゲームずつの親善試合や親善パーティに参加した。また、11月には神戸・ワールドで、後のJAL CUP大会の先駆けとなる「JALスポーツデスク招待ゲーム」が大阪支店主催で開かれた。ゲームは関西学生選抜と対戦したほか、北海道スキーツアー抽選会などで大いに盛り上がった。

★大事故を乗り越え、歓喜の大逆転1部昇格 =1985年度=★

1985年は30年間のJAL RABBITS活動の中で、全日本優勝の2004年度に次ぐエポックな年と云える。5月の日本リーグトーナメントを2勝1敗で戦い、その後の強化に余念がなかった時期に、史上最大の航空機事故である御巣鷹山事故(8月12日)が発生したのである。小生も参加した現地対応も大変だったが、チームの練習場所である羽田体育館が、遺留品置き場に半年間も使われることになった。もちろん、それ以前に大会参加そのものも検討されたが、全国転戦のリーグ戦で影響が大きいことから、当面参加の方向で活動が続けることになった。

体育館はスポーツマンシップ社のご協



昇格祝賀会の一コマ(週間朝日誌掲載)

力などで、都内の高校、中学を転々として借り歩いての練習となった。乗務の後で新宿辺まで出かけると、1時間位しか練習ができないこともよくあった。

12月からのリーグ戦では、三井（三井生命）に続き10勝4敗の2位となり、日電との入替戦に出場した。長身の外国人選手のいる相手に対し、第1戦は勝ったものの、第2戦は20点差の完敗、第3戦も終始押されざりだったが、終盤にシーソーゲームになった。残り7秒のスローインから田上が6mのシュートを放った時に終了ブザー、入って43対42の劇的な逆転勝利で1部昇格を勝取った。

★1部は甘くなし、1シーズンで2部へ降格 =1986年度=★

前年のポイントゲッター田上の引退もあったが、やはり1部での地力の差があった。リーグ14戦のうち初戦から13連敗したが、全て11点以上の点差だった。最終戦の日通（日本通運）に75対68で勝ったときは、全選手が応援席に向かって両手を突き上げ、まるで優勝したようだった。入替戦も日電に連敗して1シーズンだけで2部へ戻ることになってしまった。3月開催の全日本1回戦では、名古屋短大付属高に6点差で負けるという「おまけ」までついて、小生は会社へ出る気力が失せ翌日から3日間の休暇をとった。しかし、メンバーは本当に最後まで気を抜くことなく良く頑張ったチームだった。1部のJALをと、テレビが初戦から追いかけてきたものの勝利での放映機会がなくハラハラしたが、ようやく最終戦の後に放映できた。

★第5位、4チーム増の1部に届かず =1987年度=★

前シーズン主力の内本、木塚、小澤、円本、五味が抜け、実力の低下は否めなかった。結局、三井生命、日立甲府、三菱電機名古屋、三洋電機に次ぐ7勝7敗の第5位に終わり、次シーズンからの1部12チーム体制による4チーム自動昇格にも及ばなかった。何とも低調な1年間だった。

★大卒オールスターで2部完勝、1部へ復帰 =1988年度=★

何としても1部復帰の目標を達成しようと、強力新人の投入をもって臨んだシーズンであった。二見、新井（筑波大）、鷺見、伊藤（日体大）、林金蘭（樟蔭東短大）らが入り、林、奥出と合わせて神戸ユニバの日本代表スタメンで戦う体制に加え、コーチに第1期選手の佐野（旧姓・伊藤）を起用して心機一転をはかった。

2部リーグ戦では、興銀、三菱重工長崎、日立那珂、東芝名古屋、トヨタ自動車に完勝、15戦全勝で優勝を飾り、第一勧銀（第一勧業銀行）との入替戦に出場した。第2戦こそ1点差で敗れたものの、最終戦も安定した試合ぶりで勝ち、3年ぶりの1部復帰を果たすことができた。リーグ戦最終の興銀戦は、1部でもなかった全試合テレビ中継をNTVの好意で放映されたことが印象に残っている。

★外人チームには及ばず、純血では第2位 =1989年度=★

岩崎友子新コーチのもと、昨シーズンと変わらない主力メンバーで第1部戦に臨んだが、外国人選手を擁するシャンソン、東芝、三菱電機名古屋には及ばなかった。Aグループ4位、順位決定戦の末、総合第7位となったが、外国人選手のいないチームの中では日立戸塚に次ぐ第2位だった。

（元 JAL RABBITS 監督・部長）

注：記事中の会社及び学校の名前は当時の呼称となっています。

「バスケット村」 能登半島

羽咋町栗ノ保村 昭和初期のバスケット

[歴史部]

歴史部では日本におけるバスケットボール発展の歴史を調査研究しているが、このたび石川県羽咋町（ハクイマチ）において、昭和初期のころ、村をあげてバスケットボールに取り組んだという歴史を垣間見た。以下にその一端を紹介しよう。

▽バスケット村

能登半島の一寒村に、これ又珍しい、全村の青壮年皆バスケットの愛好者であるという村があります。石川県籠球協会の大蔵吉夫氏から寄せられた一文をご紹介します。

金澤より七尾行きの汽車に乗って、北国らしい情緒を車窓に楽しみながら一時間半ばかりゆくと、能登半島の小都市羽咋町に着きます。ここから約三キロほど歩くと、栗ノ保という村があります。この村は半農半漁で相当富裕な村ですが、珍しい事に全村挙げてバスケットをやっている変わった村です。

こんな僻村にどうしてバスケットが盛んになったのでしょうか。昭和3年(1928)4月、春暖かに輝いている昼下がり、童顔一杯に笑みをたたえて小酒平一先生が、鞆の代わりに抱いて持ってこられたのが他ならぬバスケットボールでありました。この小酒先生赴任の日から、この村にはボールとたはむれる楽しい浚刺たる声が聞かれるようになりました。先生の指導によって、早速練習を始めた村の小学校は、この年の秋の県下児童大会に、幸運にも優勝しました。これに力を得た村では来年もその次の年もと猛練習を開始して昭和3年から15年までずっと勝ち続けています。

この時の生徒達は、次第に大きくなって、村の中堅となり、バスケットはますます盛んになって、昭和6年には、第1回の社会大会に部落各層の籠球大会を開催しそれから16年迄、毎年2回大会を開いています。この大会が近づくと選手たちはいそがしい仕事の合間に寸時をおしんで練習にはげんでいます。一村こぞっての声援も大したもので、一度優勝の報せがくると提灯行列で村中を練り歩きます。子供達や青年ばかりでなく、村長さんをはじめ、学校長も先頭になって籠球研究につとめています。

文理大が石川県で合宿練習をした初日、この栗ノ保村を訪れて試合をしました。ところがこの村の選手は栗鼠のように敏捷で驚くほどよく球になれて居り、シュートも我流であるがどんなに身体が崩れていても確かなパスを投げシュート率も80乃至90パーセントという驚異的な数字を示して文理大の心胆を寒からしめたのです。この栗ノ保チームは県下大会では必ず決勝までは出ています。

スポーツは都会にばかり栄えるものであつてはならないし、学生や有閑人ばかりのものであつてはいけないと思います。このような僻村に我々のバスケットボールがみんなの楽しむ健全なスポーツとして盛んに行われていることはうれしいことではありませんか。栗ノ保村の発展を祈りつつ筆をおきます。

この「バスケット村」の記事は、昭和23年(1948)に発行された日本協会の機関誌「バスケットボール」第2号に掲載された原文をそのまま記載したものである。

当時の栗ノ保村は、現在石川県羽咋市栗ノ保地区になっており、当該教育委員会の関係者に現在の状況について尋ねてみた。

栗ノ保体育協会の設立の概要によると、今日までさまざまな競技で「スポーツ村栗ノ保」の歴史を歩んでいるようだ。中でも昭和4年(1929)に初めて小学校に取り入れられたバスケットボールは、歴史が長く輝かしい成績を残している。昭和5年(1930)には、全能登大会や石川県大会で優勝するなど、早くも「バスケットの栗ノ保」として名前が知られることになり、その勢いは昭和23年(1948)～26年(1951)まで県中学校バスケットボール大会に栗ノ保の選手が主体となったチームで4連勝している。また、在日米軍と交歓試合をしたり、昭和26年から10年間、県下バスケット大会を栗ノ保小学校運動場で開催するなど、県下では「栗ノ保のバスケット」を知らない者はいないほどであった。屋内競技であるバスケットボールも、当時は屋外運動場で行われ、栗ノ保のバスケットは「田んぼバスケット」との異名を付けられ、選手達の活躍は県下に知られていた。

昭和20年(1945)に開催された第1回国民体育大会県予選で栗ノ保主体の羽咋町チーム(当時)は各地から有力選手を集めた金沢市との代表決定戦に1点差で敗れ、全国大会へ出場できなかったほどの実力であったそうだ。

このように石川県羽咋市の栗ノ保地区でバスケットボールが盛んに行われていたことは、「昭和初期の日本のバスケットボールの普及の歴史」のいくつかの特徴を表している。

- (1) 師範学校出身の小酒平一先生が小学校に赴任してから、先生の指導の下、体操の授業でバスケットボールが行われたこと
- (2) スポーツ競技を楽しむと云う気風、土壌が村に根つき育ったこと、また「田んぼバスケット」と言われたボール、リング、コートなどはどのようなものであったか
- (3) 「籠球研究」などというバスケットの知識をどのように得ていたのか(当時既にバスケットに関する解説書栗ノ保が発行されていた)
- (4) 昭和5年(1930)に日本協会が設立されたことを考えると、その時点でバスケットボール競技が広く全国に普及し大会が開催されていた

* この当時、文理大(現筑波大学)の選手であった振興会顧問の関口荘次氏(85歳)によれば、当時の文理大チームと栗ノ保村チームとの対戦試合では、前半は互角の戦いであったという。関口氏は学生の頃から日本代表選手に選ばれて、いく多の国際試合に出場しているかつての名選手、その名選手をも唸らせた能登半島の「バスケット村」、輝かしい歴史は今でも健在だ。

また、昭和35年(1960)6月にベースボールマガジン社が発行した「バレーボール&バスケットボール」誌上で、関口氏は、栗ノ保村へバスケットボールの指導に招待された時の思い出を次のように語っている。

☆北陸地方で人気に驚く

北陸の農漁村で、非常にバスケットの盛んな村といわれた粟ノ保村に招待されたときなどの思い出であるが・・・。

村の境まで村長さん以下村会議員などの方々に迎えられ、歓迎会場は村長から村会議員、郵便局長、学校長など、村の主な人々全部で100人を超える人々が参列され、私と下級生二人中央に座られ、いろいろな歓迎の辞や挨拶をされすっかりあがってしまって、次から次へと盃を出され、受けないと失礼かと思って片っぱしから受けていたら、すっかり意識がもうろうとしてしまって、それ以後、何も覚えていなく、あとで全く恥ずかしい思いをしたこともある。

* ちなみに、拓殖大学およびJBL東芝で活躍した「北 卓也」選手は、粟ノ保地区新保町の出身。

歴史部では今後更に、大正時代から昭和初期の時代に日本のバスケットボールが普及期から揺籃期に亘る経過をたどった事実を検証する予定でいる。

「バスケット村粟ノ保」のあゆみ
 ケット村粟ノ保の名前は、昭和二十一年
 大会に於いて、決勝戦時の粟ノ保青年の
 されたのが発端である。
 内の現況を回顧するに、ミバスの発展も
 諸氏も県体や國体に出場する選手や、
 等も出現する等は、村民の周知の事実で
 へ、今日迄幾星霜各年、
 寺御世話頂いた、の方々の御苦労は忘
 此の様な業績、朝一夕に生じたもので
 顧みると、故、なられた多数の籠友達の
 られた物語、あった事を想起して、たい。知
 は半世紀以前に溯ること昭和三年、当時
 の志尾由作先生時代、教職にあられた
 信、小酒一平の三氏の指導により始め
 昭和六年頃が全盛時代で、尋常も高等
 大会で優勝したもので、昼は旗行列、晩は

開催される試合には殆んど参加
 の精進と、互に切磋琢磨した社
 ている事は夢の様である。
 特に幹旋助言を承った十三代校
 酒井真次郎の両氏には深甚な
 以下主なる経過を記述する。
 一、昭和四年バスケット始まる
 一、昭和五年能登大会石川
 一、昭和二十四年在日米軍
 一、(文理大)(阪大)との交
 一、昭和二十五年県下バス
 開催、三十四年まで
 一、昭和二十八年より年齢別
 一、昭和三十六年県下バス

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 検定球
貼り・天然皮革、7号球



www.molten.co.jp

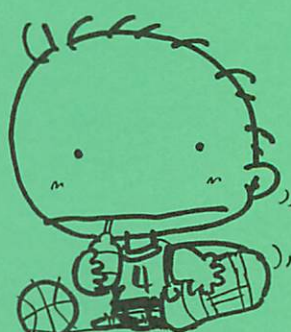
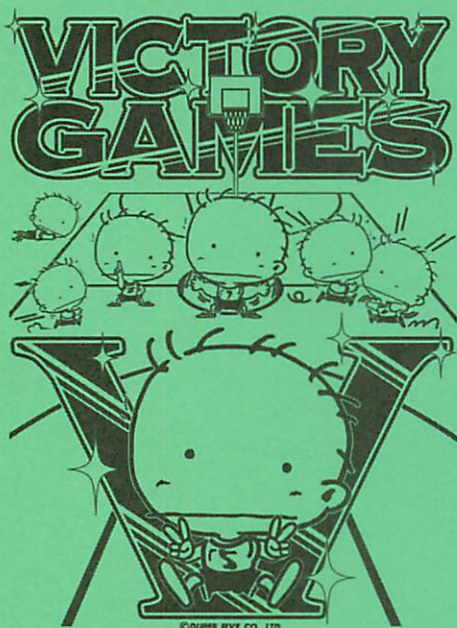
株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7



DUPER®



表現の自由人。



DUPER®

URL : <http://www.duper.co.jp>

デューパーファイブ株式会社
〒130-0023 東京都墨田区立川3-35
TEL . (03)3632-7045 (代表)
FAX . (03)3632-8327

E-mail: info@duper.co.jp